

24時間の安心に包まれて。 メデイカルホームの暮らし

高齢期における医療サポートは、日々の健康状態をチェックし、柔軟な対応を行うことが不可欠だ。こうしたニーズを叶えるのが、高齢者ホーム最大手ベネッセスタイルケアが展開する「メデイカルホーム」だ。秘訣は、医療機関とホーム職員とのチームプレイにある。

メデイカルホーム グラニー保土ヶ谷・横浜

ホームで最期を迎えた人を偲ぶメモリアルルーム。想いはいつまでも残る



コンセプトは「おもてなしの心」。上質なロビーが入居者を出迎える



ホーム長の秋山正次さん。「安心、安全、安楽の環境をご提供します」

横浜の市街地からほど近く、小高い丘の上に建つベネッセの介護付有料老人ホーム「メデイカルホームグラニー保土ヶ谷・横浜」。開設は1999年、13年もの実績と

ノウハウをもつ老舗ホームだ。長期間にわたり入居する人も多く、中には100歳を超える高齢者もいるという。

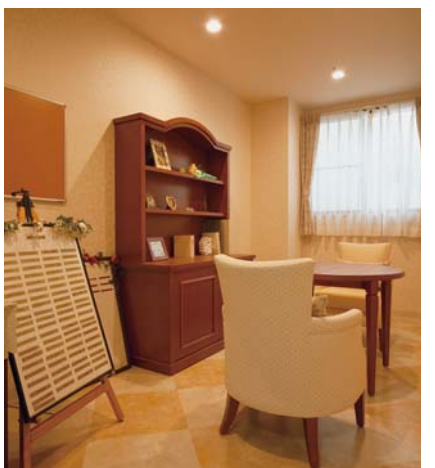
● 日常に寄り添い、支える黒子として

「年を経るにつれ医療依存度の高い方が増えたこともあり、2010年8月から看護職員24時間常駐サービス(※)を始めました。現在では、病院が

ら移られてくる方も増えていきます」と、ホーム長の秋山正次さん。「メデイカルホーム」として安心できる体制を整え、医療依存度の高い入居者を多数、受け入れてきた。

常駐する看護職員の仕事は、入居者の日々の健康状態をチェックし、入居者本人や家族と相談のうえ、医師の指示のもと必要に応じて経管栄養(胃ろう)、インシュリン注

※職員体制(看護職員+介護職員)/2.5:1以上(週40時間換算)、夜間(22時~翌6時)最少時の体制は看護職員1名、介護職員3名(満床時)



アクティビティにも使われるライブラリー



お酒を飲めない入居者でも利用できる憩いの場、バーラウンジ



運営スタッフの安達功さん。「看護職員のアドバイスは的確で、助けられます」

射、痰の吸引等を行うことだ。「単純に一日3回、栄養を摂取すればよいというものではありません。お一人おひとり、その日の体調を見極めながら、ご入居者様の主治医と相談して判断します」と、看護職員の青木法子さんは話す。入居者の日常に寄り添い、ちょっとした変化を見逃さない。病院にはない高齢期に必要なケアが、ここにはある。

● 情報共有が生み出す全員一丸の「サービス」

運営スタッフとして働く安達功さんは、こう話す。「ご入居者様のお世話の中には、介護の管轄が医療の管轄か、非常に難しいものがあります。しかし私たちは、皆様の日頃の健康状態について綿密に『申し送り』を行っています。看護職員と目線を合わせた形での介護が行えていると感じます」

看護職員とサービスマネージャー(フロアごとの介護リーダー)らは月に2回ミーティングを行い、各入居者の現状について細かな情報交換を行う職種を超えた風通しのよい環境で、職員が一体となって行う「情報共有」こそが、メデイ

に徹する」という介護職員も、その想いは同じである。

カルホームグラニー保土ヶ谷・横浜の最大の特長だ。「健康管理は看護職員、介助は介護職員と、切り離すものではありません。役職や職種に関係なく、その方のことを想った人間が素早く行動することこそが、求められているのだと思います」(秋山さん)

入居者が求めるもの、家族が求めるものを全員が想像し、全員でケアする。かきねのないうチームケアが、入居者の満足感を生み続けている。

車椅子の人でも安心なバリアフリー設計の居室。スタッフが携帯するPHSにつながる、ナースコールも完備されている

※P178に詳細データ

